

# アフラの謎

— T・E・ヒューム初期未定稿についての覚書き

兼 武 進

—

finite number of lights.

一九九九年夏の一日、わたくしは英国スタッフォードシャーのキール大学図書館特別閲覧室にゐた。目の前にあるのはT・E・ヒュームの未定稿「言語と文体に関する覚書き」『Notes on Language and Style』の手稿だった。

百枚ほど束ねてある走り書きのメモを読みはじめてから三時間近くもたつてゐただらうか、そろそろファイルも終りに近づいた一枚の用紙を裏返したわたくしは、思はず、わが目を疑った。そこには、つぎのやうな断章が書き留められてゐたのである。

How is it that London and most places look prettier by night?

Because for the general cindery chaos, there is substituted a simple, designed, ordered arrangement of a

この文章は、これまでに公刊されたヒュームのどの刊本においても、もうひとつの初期未定稿「灰燼」『Cinders』のほうに含まれてゐて、「言語と文体に関する覚書き」のなかには入つてゐないものである。それにまた、表現も、「灰燼」に収められてゐる章句とはわづかながら異つてゐる。ちなみに、これまでの刊本では、つぎのやうになつてゐる。

Why is it that London looks pretty by night? Because for the general cindery chaos there is substituted a simple ordered arrangement of a finite number of lights.

その日わたくしがキール大学を訪ねたのは、この図書館がヒュームの未定稿の手稿を所蔵してゐることを教へられてゐて、せつか

くの英国留学の機会に、ぜひ彼の筆跡に自分の目で触れたいといふ、ただそれだけの動機からであつた。もつとも、さういふ機会が研究者にとつて至福の時間であることはいふまでもない。

それにしても、なぜこの章句がここにあるのか。この疑問をきつかけにして、わたくしはこれまでに公刊されてゐる「言語と文体に関する覚書き」のテキストを、このキール大学図書館所蔵の肉筆原稿と照合してみることにした。結局、留学の残り八ヶ月ほどのあひだにケンブリッジからさらに二度、帰国後も東京から一度、キール大学を訪ねることになつた。

調べてみて分つたことはふたつある。ひとつは、キール大学所蔵のヒュームの手稿を基準にすると、現在まで数度にわたつて公刊が重ねられてきた「言語と文体に関する覚書き」のテキストにはまだ改訂の余地がいくらか残されてゐることである。もうひとつは、「言語と文体に関する覚書き」と「灰燼」は、じつは、本来同根の覚書きがなんらかの理由によつてふたつに分割される結果になつたのではないかと思はれることである。

このうち後者について考察するのが本稿の目的である。結果論として、ふたつの未定稿が同根である可能性については、公刊されてゐるテキストの内容からだけでも推測できることといふことができやうだが、本稿では、キール大学所蔵稿本に触発された推定であることを断つて、その可能性に関する現在のわたくしの見解をまとめておきたいと思ふ。前者については、改めて発表の機会を得たい

と考へてゐる。

## 二

「言語と文体に関する覚書き」はヒュームの生前には雑誌にすら発表されることはなく、死後に遺された未定稿の覚書きである。それを活字に起したテキストは現在までに、管見に入つたかぎりでは、三種類ある。最初は、一九二五年にハーバート・リードが編纂して、T・S・エリオット編集の季刊誌『クワイティアリアン』に発表したものの、つぎは、マイケル・ロバーツが一九三八年に評伝『T・E・ヒューム』に「付録」のひとつとして採録したもの、そして最後が、カレン・センジェリが編纂して一九九四年に刊行した『T・E・ヒューム著作集』収録のものである<sup>(1)</sup>。

しかし、これら三種類のテキストがどのような性格のものであるかを見る前に、一九二四年に公刊されたハーバート・リード編集『スペキュレイションズ』の「前書き」を見ておく必要があらう。そこでリードは、ヒュームの論文や遺稿を整理した結果、少くとも六種類の著作または連作が準備中であつたことが分つたと述べ、つぎのやうに列挙してゐる。

### I 現代芸術論

## II ベルクソン哲学の全体的紹介

## III ジェイコブ・エプスタイン論および彫刻の美学

## IV 表現と文体に関する著作（文学の心理学）

## V 反ヒューマンニズム、反ロマン主義、ルネサンス前哲学に関する一連の論説

## VI 寓意物語形式による、ひとつの哲学または「世界観」

そして、つづけて、それぞれのカテゴリーについてどのやうな準備が行はれてゐたかが簡潔に紹介されてゐるのだが、ここでは、当面の課題に関りのあるIVとVIについて、リードのまとめを摘記してみる。まづ、IVについては、

ヒュームが構想してゐた独創性の高い著作のなかでは、「表現と文体」に関する著作のみが萌芽状態を出ない覚書きの形で存在してゐる。これは、ある種のイメージや表現と関りのある一連の思考をわづかに当人に指し示すだけのものである<sup>(3)</sup>。

VIについては、もつと詳細に、つぎのやうに説明してゐる。

最後に、ヒュームがその思考の大部分を投入し、たえず見なほしてゐた原稿がある。これはヒューム独自の哲学となるはずのもので、おそらくニーチェの『ツアラトウストラ』に似た寓

意形式をとりつつ、世界には統一があるといふ思想、あるいはあらゆることが言葉で表現できるといふ思想、を論駁することを窮極の目的としてゐた。この著書のための覚書きはかなりの長期間——おそらく十年か十五年——にわたつて書きつがれ、たえず書きなほされたり修正されたりしてゐる。覚書きはいづれも決定稿となるには到らず、主人公となるべきアフラといふ名前を別にすれば、寓意物語としての構成を示唆するものも皆無である。そのなかでも比較的に繋りのたどりやすい断章をまとめて本書に収め、ヒューム自身の表題を附して「灰燼」とした<sup>(4)</sup>。

ここで、右のふたつの引用で以後の推論にかかはる要点を整理しておけば、IVは、「表現と文体」をテーマとする覚書きで、原稿の完成度は「萌芽状態を出ない」ものである。一方、VIは、「世界には統一があるといふ思想、あるいはあらゆることが言葉で表現できるといふ思想、を論駁することを窮極の目的」とするもので、「主人公となるべきアフラといふ名前を別にすれば、寓意物語としての構成を示唆するもの」こそなかつたが、原稿の完成度は、「たえず書きなほされたり修正されたり」して、「たえず見なほしてゐた」域には達してゐたわけである。

さて、本稿のテーマである「言語と文体に関する覚書き」がはじ

めて活字となつたのは、先に述べたやうに、『スペキュレイションズ』刊行の翌年、一九二五年のことである。『クライティリアン』誌掲載にあつてリードが書いた序言のうち、この未定稿の内容ではなく、発表の経緯にかかはる部分だけを抜萃すると、冒頭のつぎの一節がそれに当る。

ヒュームの手稿から起された以下の覚書きは、先に一卷として刊行された『スペキュレイションズ』には収められてゐない。主として経済的な理由からであつたが、しかしまた、打ち明けていへば、原稿の判読がきはめて困難なために、それらが全体としてどのやうな価値を有するのか、にはかに見えてこなかつたからであつた<sup>(5)</sup>。

これを読むだけでは、『クライティリアン』誌に公表された未定稿が、先に引用したリード自身による六つのカテゴリーのうちIVに属するのか、VIに属するのか、明らかではない。いづれに属するかは、未定稿の内容と原稿としての完成度などを尺度として判断するしかあるまいと思はれる。ここではこのことを指摘するだけにとどめる。

つぎに公刊された「言語と文体に関する覚書き」のテキストはマイケル・ロバーツの編纂にかかるものである。評伝『T・E・ヒューム』の「付録」として収められたテキストには、ロバーツによる

つぎのやうな自註がついてゐる。

以下の覚書きがハーバート・リード編纂の『スペキュレイションズ』に納められなかつたのは「主として経済的な理由からであつたが、しかしまた、打ち明けていへば、原稿の判読がきはめて困難なために、それらが全体としてどのやうな価値を有するのか、にはかに見えてこなかつたからでもあつた。」一九二五年七月にリード氏は遺されてゐた覚書きのおほよそ半分を『クライティリアン』誌に発表した。本書に収録するテキストにおいては、重要な意味をもつものはなにひとつ省略されず、また配列もヒュームの手稿の順序に綿密に従つてゐる。(これらの覚書きはばらばらの用紙に書かれてゐて、一部がいくつかのフォルダーにまとめられてゐる。) まれに見られる綴りの間違ひは正し、手稿から活字に起されると目障りになる短縮形は本来の綴りにもどしたが、ときに散見される文法上の破格を取り除いたり、単なる覚書きを首尾の整つた文に書き改めたりはしなかつた。そのままに十分に意味は明瞭であり、なんらかの改変を加へるとかへつて文章の調子を歪める惧れがあると思つたからである<sup>(6)</sup>。

マイケル・ロバーツがここで行つたことは、ハーバート・リードが『クライティリアン』誌に発表したテキストからもまだ洩れて

ゐた覚書きを補つて、ほぼ二倍の分量のテキストに拡充したこと、断章の配列を「ヒュームの手稿の順序に綿密に従つて」行つたこと、それから、リードがときに整へておいた文をヒューム本来の覚書きのままに復元したことである。要するに、ロバーツの編纂によつて、われわれはヒュームが書き残したままの覚書きに大幅に近づくことができるやうになつたのだつた。

三番めの、もつとも新しい試みはカレン・センジュリによるテキスト編纂である。編纂の方法について彼女はつぎのやうに解説してゐる。

ここに納めた覚書きは、一九〇七年ごろヒューム自身によつて百枚以上のばらばらの用紙に書き留められたもので、現在はキール大学図書館に所蔵されてゐる。ヒュームが書いた構想の試案が数ページ存在するものの、これらの覚書きは決定稿には到らず、生前活字になつて公刊されることもなかつた。(中略)ここに収録するテキストはおほむねロバーツの順序に従つてゐるが、個々の断章はいつさう断片的な、ヒュームが遺したままの形に復元されてゐる。また、ヒュームの手稿と異なる部分を校合した断章もいくつか含まれてゐる。リードがロバーツによつて付け加へられたと思はれる表題は括弧に入れた<sup>(7)</sup>。

カレン・センジュリはマイケル・ロバーツ編纂のテキストにもま

だ残つてゐたヒューム手稿とのずれを正し、肉筆原稿の姿を活字で正確に伝へようと試みたわけである。それに加へて、もうひとつ評価されるべきは、「構想の試案が数ページ存在する」事実を明らかにしたことである。

このやうにたどつてくると、「言語と文体に関する覚書き」のテキスト編纂の歴史はヒュームの自筆稿をなるべく正確に復元しようとする試みの積み重ねであつて、これは当然といへば当然の営為である。

ただ、一九二五年にハーバート・リードによつて「言語と文体に関する覚書き」のテキストが公刊されて以来一貫して、これが独立の未定稿として扱はれてきてゐるが、はたしてこのふたつの未定稿がそれほど独立した論考の覚書きとしての実態をもつてゐるかといふ点になると、わたくしはいささか疑問なしとしない。確かに「灰燼」の原稿がすでに存在せず、あまつさへ現在の「灰燼」のテキストがリードによつて整へられてゐる箇所もある以上<sup>(8)</sup>、両未定稿の同根を確実な事実として裏づけるのは原理的には不可能であらう。しかし、キール大学図書館所蔵の「言語と文体に関する覚書き」の手稿も参照しながら両未定稿の内容を比較考量することによつて、同根の可能性をかなりの程度まで推定することができるのではないかと思はれるのである。

また、両未定稿の執筆時期について、ハーバート・リードの解説と以後の編者たちの指摘は食ひ違つてゐる部分もあるが、今はその

ことには触れない。

三

両未定稿同根の可能性はふたつの次元で示唆されてゐるやうにわたくしには思はれる。ひとつは、断章の内容を構成する要素の次元であり、もうひとつは、それらの要素の相互関係の次元である。

まづ、第一の、両未定稿同根の可能性を示唆する要素のはうであるが、これには二種類のものがある。ひとつは、ニーチェの『ツアラトウストラ』にならつて考へだされたとされる、寓意物語の主人公アフラの存在であり、いまひとつは、一方の未定稿で中心的な働きをしてゐる概念が他方の未定稿にもしばしば現れてゐることである。

アフラの存在から見ていかう。

「灰燼」の主人公アフラがニーチェの超人ツアラトウストラにならつて構想された人物であることは、すでに諸家の指摘がある。ツアラトウストラとは古代ペルシアのゾロアスター教または拝火教の開基ゾロアスターの別称であり、ニーチェはその名を借りて独自の超人的予言者を創造したといはれてゐる。ところで、その拝火教は別名マズダ教とも呼ばれ、その主神はアフラ・マズダである。アルファベットに移したときの綴りが少し異りはするが<sup>(9)</sup>、それはツアラ

トウストラについてもいへることであるから、ヒュームの念頭にはそのマズダ教の主神のことがあつたと考へてよいのではあるまいか。さうだとすると、ヒュームはニーチェに学んで、みづからのツアラトウストラを創造しようとしてゐたといつてよいであらう。「灰燼」のなかに、『ツアラトウストラ』第一部に出てくる「ニーチェの綱渡り師のイメージ」への言及があつたり、しばしば「肉体」の価値への言及があつたりすることも、その影響関係を示唆するものと見てよいであらう<sup>(10)</sup>。

とはいへ、未定稿「灰燼」は、例へばハーバート・リードによつて「主人公となるべきアフラといふ名前を別にすれば、寓意物語としての構成を示唆するものも皆無である」といはれながら、アフラの名前が明示されてゐるのは一度だけである。もつとも、これは説明のつかないことではなくて、ニーチェの『ツアラトウストラ』同様、人生や真理に関する説教を展開したあとで「アフラはかう語つた」と付記すれば、ヒュームの覚書きは活かされることになるからである。ちなみに、アフラが登場するその断章「アフラの指」は、文章の肌理の細かさや完成度において他に抜きん出てゐるやうに見受けられるものであるが、しかし、アフラへの言及が「灰塵」のテキスト全体で一度だけといふ事実は否定すべくもない。

意外に思はれるのは、そのアフラの名前が「言語と文体に関する覚書き」のほうには二度も現れてゐることである。しかも、キール大学図書館所蔵の手稿をつぶさに読むと、アフラへの言及と判読で

きるが、これまでの刊本には収録されてゐない箇所がもう一ヶ所あり、それを合せると三度になる。

つぎに、ふたつの未定稿に共通に現れる、ふたつの重要な概念について見てみる。

アフラに仮託して人生や世界の真実を語らうとする未定稿「灰燼」で鍵になる概念は、表題のとほり「灰燼」である。本稿の冒頭に掲げたロンドンの夜の断章もさうだが、ほかにもいくらかもあり、例へば、つぎのやうな断章に見られる。

宇宙を包括する体系を発見することは困難である。なぜなら、そのやうなものは存在しないからである。宇宙は部分的に組織化されてゐるにすぎず、残りの部分は灰燼である<sup>(11)</sup>。

死とは、崩壊して灰燼と化すことである。古代ギリシア人が考へた死者の国ハデス（組織化が行はれること少く、幸福は皆無の場所）に一半の真理があるのはそのためである<sup>(12)</sup>。

ところが、鍵の位置にある概念「灰燼」はもうひとつの未定稿「言語と文体に関する覚書き」にもしばしば現れる。ふたつほど例を挙げよう。

ステージで踊る赤い少女。

灰燼の複合体。それゆゑ、古代の本質にはなんら起因しないところの。

(i) 哲学 (ii) 美学の基礎としての灰燼<sup>(13)</sup>。

チェス・ボード上を動く赤い駒としての文学、ときをり意識をもちつつ灰燼が漸進的に変化していくものとしての人生<sup>(14)</sup>。

一方、「言語と文体に関する覚書き」で重要な概念であるチェスの「駒」も未定稿「灰燼」に現れるのだが、このはうの頻度ははるかに高くなつてゐる。まづ、「言語と文体に関する覚書き」のはうから見ていく。

現代の散文の理想は、すべて駒となることである。すなはち、思考を加へずに結論に到達することである<sup>(15)</sup>。

言語表現といふチェス・ボード。そこではふたりのプレイヤーが交互に駒をおくのだ。駒自体に関心をもつたプレイヤーはみづから駒を彫り、一種の恍惚のなかで駒を眺める<sup>(16)</sup>。

この「駒」といふ概念が未定稿「灰燼」のはうにも頻繁に現れるわけだが、そのなかからふたつだけ例を引く。

世界を言葉で描くことはできない、すなはち、駒に還元することはできない。とりわけ、世界のすべてを、「神」や「真理」のやうな、形式的な、いはば大きな駒のもとに包摂することは不可能である。象徴的言語の病ひ<sup>(17)</sup>。

科学にかぎらない、あらゆる思考の目的は、砂礫と灰燼からなる、複合的で、必然的に支離滅裂な世界を、少数の理念的な駒に還元することである。われわれはその駒を動かすことによつて、砂礫とは似もつかない現実の映像をつくりあげるのだが、この映像は、われわれの世界を征服したいといふ意欲や征服したといふ感覚に媚びるものである<sup>(18)</sup>。

このやうにいくつかの例を挙げて比較しただけでも、ふたつの未定稿が共通の要素をもつてゐること、それもきはめて本質的な内容において通底してゐることが納得されるであらう。

念のために、ここで視点を變へて検討しておいたほうがよいと思はれることがある。未定稿「言語と文体に関する覚書き」のなかには、逆に、これらふたつの未定稿がそれぞれ独立のものとして構想されてゐることを証する部分はないのであらうか。じつは、「言語と文体に関する覚書き」より早い時期に用意されたメモの存在を示唆してゐるのではないかと思はれる。「以前のメモ帳」：(the old

book」といふ語句が二ヶ所に出てくるのである。

これが示唆してゐるのはつぎのやうなことである、すなはち、推理の型は盤上の駒の並べ方に等しいものであり、そこでは、精神が対象と深くかかはりつつ思考せずとも、駒だけを動かすことができる。(この件については、チェス・ボードに関する、以前のメモ帳の覚書きと対照せよ<sup>(19)</sup>。)

詩人と読者の関係について間然するところのない理論は、以前のメモ帳において考察されたものだが、じつは、それは、音楽会の会場から出てきて家路をたどる少年たちが口笛であるメロディーを吹いてゐるのを聴いてゐるうちに、突如として、目に映つたものだった。チェルシー宮<sup>(20)</sup>。

このうち前者、「チェス・ボードに関する、以前のメモ帳の覚書き」については、未定稿「灰燼」のなかに何ヶ所か該当する章句を見出すことができる。ところが、後者の「詩人と読者の関係」については、「言語と文体に関する覚書き」のなかにかなり詳しい記述はあつても、肝腎の「灰燼」のなかに該当する部分を見つけることはできないのである。このことはどう説明すればよいのだらうか。ひとつ考へられるのは、かつては「以前のメモ帳」に含まれてゐたが、後に新しいメモ帳、すなはち「言語と文体に関する覚書き」の



はうに覚書きの用紙が移動したのではないか、といふ推測である。裏づける事実にもとづいての推測ではないが、しかし、この「詩人と読者の関係」に関する覚書きの移動の可能性は、ふたつの未定稿がそれぞれに独立した覚書きであることを積極的に証明するものではない、といへるのではないだろうか。

それどころか、むしろ、両未定稿が同根であることを直截に証明すると思はれる章句のほうがテキストのなかに見出されるのである。先に共通の要素の相互関係と指摘した部分であるが、例へば、「言語と文体に関する覚書き」のなかのつぎの断章がさうである。

アフラが見るのは、盤上を駒さながらに動される平板な語ではなくて、ぴつたりとイメージの張りついたひとつひとつの語なのである<sup>(21)</sup>。

チェスの駒の譬喩を使って抽象的な言葉の使用を批判するのは「言語と文体に関する覚書き」のテーマのひとつであることは今さらくりかへすまでもないが、それがここでは、リードによつて未定稿「灰燼」の中心的な人物とされるアフラ自身と直接に結びついてゐることに注目しなければならない。

また、ふたつの未定稿でそれぞれ鍵になる概念がひとつの断章のなかで緊密に結びついてゐる例もある。これまでに引用したなかに

もそのことを感じさせる例はあるが、「灰燼」のなかのつぎの例などは両者の密接な連関をもつと直截に明示してゐるといへやう。

この多元性が灰の山に存在する。この灰塵の灰溜めには、秩序づけられたある種の回路がつくられてゐて、なんらかの統一が構成されてゐる——灰塵の堆積のうへにある種の人工的なチエス・ボードが置かれてゐるのである。灰塵のうへには、本物のチエス・ボードではなく、すでに言及した紗のやうな象徴的伝達の世界が刻印されてゐるのである<sup>(22)</sup>。

ここでは〈灰燼〉の世界観と〈チェス・ボードの駒〉の言語観が渾然と融合されてゐて、ふたつの視点が相互に密接な関係にあること、さらにいへば、ふたつの未定稿が実質的に同根であることを、なにもまして強く示唆してゐる、と解釈してよいやうに思はれるのである。

#### 四

このやうに見てきて、ふたつの未定稿の位置づけと相互の関係について、どの程度のことがいへるのであらうか。

もし未定稿「灰塵」が、ハーバート・リードの『スペキュレイションズ』「前書き」でまとめられてゐる「VI 寓意物語形式による、

ひとつの哲学または『世界観』に対応し、未定稿「言語と文体に関する覚書き」のほうが「Ⅳ 表現と文体に関する著作（文学の心理学）」に対応するものと仮定すれば、扱はれてゐるテーマといふ観点から見て、不都合はないものといふことができる。ただ、未定稿「言語と文体に関する覚書き」ははたして「萌芽状態を出ない覚書き」で、「ある種のイメージや表現と関りのある一連の思考をわざわざに当人に指し示すだけのもの」にすぎないといつてよいものか、どうか。わたくしの見るところ、この未定稿はそれよりはるかに充実した内容をもつてゐて、読む者にヒュームの言語観についてかなり多くのことを語りかけてゐるやうに思はれる。

一方、『スペキュレイションズ』「前書き」の「Ⅳ 表現と文体に関する著作（文学の心理学）」に対応するのが、かりに、カレン・センジュリが存在を指摘してゐる「構想の試案」だと仮定して、未定稿「灰塵」も未定稿「言語と文体に関する覚書き」もともに「Ⅵ 寓意物語形式による、一つの哲学または『世界観』」を構成すると考へれば、どういふことになるだらうか。リードの解説によれば、「Ⅵ 寓意物語形式による、一つの哲学または『世界観』」は「世界には統一があるといふ思想、あるいはあらゆることが言葉で表現できるといふ思想、を論駁することを窮極の目的としてゐた」わけで、両方の未定稿ともこの枠のなかに入ることではできない。さうすると、やはり『スペキュレイションズ』「前書き」にあつた「そのなかでも比較的に繋がりのとおりやすい断章をまとめて本書に納め、ヒューム自身の表題を附して『灰塵』とした」覚書きに、「原稿の判読がきはめて困難なために、それらが全体としてどのやうな価値を有するのか、にはかに見えてこなかつた」部分を付け足して、より完全なテキストを目指した、といふことになるであらう。これはこれで筋の通る推理になるのではあるまいか。「言語と文体に関する覚書き」のフォルダーに含まれてゐる「構想の試案」が「（文学の心理学）」といはれるに値するほどの内容をもつてゐるかどうかが決め手になるであらう<sup>(23)</sup>。

いづれにせよ、すつきりと割り切れた説明はできさうにない。そのやうな状況を考慮に入れたうへで、わたくしはこのふたつの未定稿について、つぎのやうな仮説を立ててみたいと思ふ。

ヒュームのふたつの未定稿「灰塵」と「言語と文体に関する覚書き」は、アフラといふ人物や〈灰塵〉の世界観と〈チェス・ボードの駒〉の言語観を共有してゐることから明らかなやうに、本来、同根のものであつた。それをヒュームはなにかの折にふたつの論考に分けて、さらに考察を重ねようとしたのかもしれないが、かりにそれがまさしく彼の意図であつたとしても、決定稿を得るには到らなかつた。それどころか、構想の実現といふ観点から見れば、かなり初期の段階で停滞してしまつたのではないだらうか。ふたつの未定稿に共通の要素の多いこと、とくに両方にアフラが登場してゐることがその可能性を示唆してゐる。

さうして、もしこの両未定稿同根の仮説が正しいとすれば、「表現と文体に関する著作（文学の心理学）」は、リードの『スペキュレーションズ』『前書き』で指定された「IV」の位置ではなく、「寓意物語形式による、ひとつの哲学または『世界観』」の脇、それも後ろに置かれるべき性質のものであると思はれる。

拙稿の冒頭に掲げた謎——有限個の燈火に浮びあがるロンドンの夜の美しさを指摘した断章が、なぜ、現在行はれてゐるテキストとは違って、「言語と文体に関する覚書き」のフォルダーに含まれてゐるのか——は、今のところ、解くことができない。あひかはらず謎である。章句に推敲を凝すヒュームがたまたま書き散してゐたメモのひとつがそこに残つてゐたとも考へられるし、ヒュームかだれかがその書込みを整理して、われわれが現在刊本で見るやうな文章に整へて、「灰塵」のなかに含めたとも考へられる。ほかに、この謎を解く推理は可能であらう。しかし、事態がどうであつたにせよ、この一句の存在がふたつの未定稿の同根を象徴してゐることだけは確かだといへやう。

## 註

- (1) これまでに公刊されてゐる「言語と文体に関する覚書き」のテキストまたはテキストを含む版は、わたくしが参照し得たかぎり、つぎの六種類である。

- ① Herbert Read(ed.), "Notes on Language and Style," *The Criterion*, Vol. III, No. 12, July 1925.
- ② Herbert Read(ed.), *Notes on Language and Style* (University of Washington Book Store, 1929)
- ③ Michael Roberts, *T.E. Hulme* (Faber and Faber, 1938)
- ④ Samuel Hynes (ed.), *Further Speculations* (University of Minnesota Press, 1955)
- ⑤ Karen Csengeri (ed.), *The Collected Writings of T.E. Hulme* (Oxford University Press, 1994)
- ⑥ Patrick McGuinness (ed.), *T.E. Hulme: Selected Writings* (Fyfield Books, 1998)
- このうち①と②は同じテキストであり、③のテキストはそのうち④と⑥に収載されてゐる。なほ、小論冒頭の引用については、例へば Karen Csengeri (ed.), *op. cit.*, p. 10 参照。
- (2) Herbert Read (ed.), *Speculations* (Routledge & Kegan Paul), p. xiii.
- (3) *Ibid.*, pp. xiii—xiv.
- (4) *Ibid.*, p. xiv.
- (5) *The Criterion*, Vol. III, No. 12, p. 485.
- (6) Michael Roberts, *op. cit.*, p. 271.
- (7) Karen Csengeri (ed.), *op. cit.*, p. 23.
- (8) *Ibid.*, p. 7.
- 「灰塵」のテキストの解説のなかに、つぎのやうな編者の指摘がある。

“The manuscript is now lost. What remain are the posthumously published versions which Read, as editor, ‘pruned... a good deal’ (Letter from Read to C. K. Ogden, 16 Apr. 1923).”

テキスト編集にあたり、ハーバート・リードによって「大幅な剪定」が行はれてゐるのである。それがどの程度のものであるかは、「言語と文体に関する覚書き」についての註(1)の①および②と③および⑤とを比較すれば、おおよその見当がつくが、本稿ではそのことにはこれ以上は触れない。

- (9) マスター教の主神アフラ・マズダは英語では Ahura Mazda (*Encyclopaedia Britannica*) と表記されてゐるのに対して、T・E・ヒュームの表記は Ahra<sup>h</sup>z<sup>h</sup>as<sup>h</sup>。

- (10) “Nietzsche’s image of the tight-rope walker”は Karen Csengeri(ed.), *op. cit.*, p. 9 ほか、当該の箇所を参照。また、ニーチェの「肉体」の価値への言及については「ツァラトゥストラ」の「身体の軽蔑者」ほかを参照。

- (11) Karen Csengeri(ed.), *op. cit.*, p. 9.  
*Ibid.*, p. 9.  
(12) *Ibid.*, pp. 34—5.  
(13) *Ibid.*, p. 40.  
(14) *Ibid.*, p. 25.  
(15) *Ibid.*, pp. 30—1.  
(16) *Ibid.*, p. 9.  
(17) *Ibid.*, p. 11.  
(18) *Ibid.*, p. 25.  
(19) *Ibid.*, p. 25.

なほ、“(the) old book”を「以前のメモ帳」と解釈するのは、カレン・セングエリの指摘によろ。 Cf. *ibid.*, p. 458.

- (20) *Ibid.*, p. 39.  
(21) *Ibid.*, p. 24.  
(22) *Ibid.*, p. 9.

- (23) 注(5)の引用で「それらが全体としてどのような価値を有するのか」と訳した箇所は、原文では“their corporate value”である。「全体として」の部分には「全体にたいして」とも解釈できるやうに思はれるが、さうだとすれば、このあたりの推理にいつさう好都合な証拠とならう。

(本稿は、跡見学園留学制度による平成十一年度海外研修の成果の一部である。また、筆者を Official Visiting Scholar として受け入れ、恵まれた研究の機会を与へられた英国ケンブリッジ大学英文科、および、貴重な T・E・ヒューム手稿の閲覧と引用を許可された英国キール大学図書館に心よりお礼を申し上げる。)